

氏 名： 上田 ゆみ子
学位の種類：博士（看護学）
学位記番号：甲第 94 号
学位授与年月日：令和 5 年 3 月 21 日
学位授与の要件：学位規則第 15 条第 1 項該当
論文題目：卒業時修得を目指すコミュニケーションスキル評価尺度の開発と関連要因の検討
学位審査委員： 主査 片岡 純
副査 小松 万喜子
副査 深田 順子
副査 服部 淳子
副査 戸田 由美子

論文内容の要旨

I. 研究背景

看護師にはコミュニケーション能力の向上が求められており、看護基礎教育において教育方法が工夫されているが、その効果は演習などの評価にとどまり、コミュニケーションスキルの効果の検証は十分とはいえず、看護学生のコミュニケーションスキルを評価する尺度は、患者とのコミュニケーションに焦点をあてたものが多い。しかし、看護学生のコミュニケーションの対象は、患者家族、グループメンバー、教員や実習指導者、看護スタッフや他の専門職者を含み、さまざまな対象とのコミュニケーションに必要なスキルが網羅的に測定できる尺度の開発が必要である。

II. 卒業時修得を目指すコミュニケーションスキル評価尺度の開発（研究 1）

1. 研究目的

看護学生が卒業時に修得を目指すコミュニケーションスキルを評価するための尺度を開発する。

2. 研究方法

1) 質問項目の選定および評価尺度原案の作成

(1) 方法

文献検討の結果から質問項目 56 項目を作成した。尺度項目の表面妥当性および内容妥当性に関する質問紙調査を臨地実習指導者および看護学教員を対象として実施した。調査の結果に基づき看護学の専門家らと修正を検討

し、卒業時修得を目指すコミュニケーションスキル評価尺度（以下、卒業時修得コミュニケーションスキル尺度）原案を作成した。さらに、原案について看護学生を対象とした表面妥当性に関する予備調査を行った。

(2) 結果

看護教員と臨床看護師に調査をした結果、56 項目の質問項目について卒業時に修得が必要と回答された割合が 70%未満の項目は 1 項のみで「自分の気持ちに正直で言動を一致させて関わる」であった。専門家らと、質問項目の抽象度、表現が類似した項目などの検討を行い 52 項目に整理した。看護学生各学年 2 名の計 8 名を対象とした表面妥当性に関する予備調査の結果「意図がわかりにくい、回答しづらい」という意見はなかった。

2) 尺度原案 52 項目の信頼性・妥当性の確認

(1) 方法

地域と国公立・私立の偏りがないように国公立大学 14 校、私立大学 21 校へ依頼した。承諾が得られた国公立大学 4 校、私立大学 6 校に学生へ質問紙の配布またはメールの配信依頼をした。看護学生 3,405 名に研究協力を依頼し、回答が得られた 293 名（回収率 8.60%）を分析対象とした。

(2) 調査内容

検証する尺度として「卒業時修得コミュニケーションスキル尺度の原案（52 項目）」、基準関連妥当性を確認する尺度として「コミュニケーション・スキル尺度 ENDCOREs（以下、ENDCOREs）（24 項目）」、「日本版 Rathus Assertiveness Schedule（以下、J-RAS）（30 項目）」の回答を依頼した。

(3) 分析方法

項目分析を行い、天井効果と床効果、I-T 相関、G-P 分析、項目間の相関を検討した。探索的因子分析にて因子の抽出（主因子法、プロマックス回転）を実行した。尺度全体と各因子の Cronbach's α 係数を算出し内的整合性を確認した。基準関連妥当性は、「卒業時修得コミュニケーションスキル尺度」と「ENDCOREs」および「J-RAS」との相関係数を求め、併存妥当性を検討した。

(4) 結果

全学年において天井効果がみられた 2 項目を削除し 50 項目とした。項目間相関が $r \geq |.70|$ を示すペアはなかった。各学年において、探索的因子分析を行った結果、5 因子を因子数と仮定した。また、卒業時における修得を目指しているため、4 年生のデータで 2 回目以降の分析を行い、最終的に 48 項目にて因子分析を行った。「30：共感していることを言葉であらわす」の因子負荷量は 0.33 であったが、対象が安心感を得るには重要なコミュニケーションスキルであると考えたため、項目を残した。その他については因

子負荷量が 0.35 を上回り、5 因子構造となることを確認した。累積寄与率は 56.12%、標本妥当性を示す KMO は.80 であり、G-P 分析にてすべての項目が $p < .001$ であることを確認した。尺度全体の Cronbach' s α は.96、第 1 因子.92、第 2 因子.90、第 3 因子.87、第 4 因子.82、第 5 因子.79 であり、因子全体の内的整合性を確認した。第 1 因子は「相手の気持ちや考えを受け止めるスキル」、第 2 因子は「お互いの気持ちや考えを伝えあうスキル」、第 3 因子は「相手に関心を寄せて深く聴くスキル」、第 4 因子は「自分の感情をコントロールして話しやすい状況を整えるスキル」、第 5 因子は「態勢を整えて会話を始めるスキル」と命名した。

「卒業時修得コミュニケーションスキル尺度」と ENDCOREs の総得点の相関は $r = .70$ ($p < .001$) であり、併存的妥当性があると判断した。J-RAS と「卒業時修得コミュニケーションスキル尺度」の相関は、第 2 因子「お互いの気持ちや考えを伝えあうスキル」との間に $r = .34$ ($p < .001$)、第 5 因子「態勢を整えて会話を始めるスキル」との間に $r = .21$ ($p < .05$) の弱い相関がみられた。

III. 看護学生のコミュニケーションスキル修得に影響する要因の検討 (研究 2)

1. 研究目的

看護学生のコミュニケーションスキル修得に影響する要因を明らかにする。

2. 研究方法

1) 方法

地域と国公立・私立の偏りがないように、国公立大学 41 校、私立大学 64 校へ依頼した。承諾が得られた国公立大学 10 校、私立大学 7 校に学生へ質問紙の配布またはメールの配信を依頼した。看護学生 5,298 名に研究協力を依頼し、回答が得られた 238 名 (回収率 4.49%) を分析対象とした。

2) 調査内容

「卒業時修得コミュニケーションスキル尺度 (48 項目)」、「ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版 (以下、自尊感情尺度) (10 項目)」、「一般性セルフ・エフィカシー尺度 (以下、自己効力感尺度) (16 項目)」および個人属性 (性別、年齢、学年)、他者との関わり (同居家族、ボランティア経験、アルバイト経験、1 日のスマートフォンの使用時間、1 日のインターネット閲覧時間)、実習経験 (コミュニケーションに関するロールモデルの有無と対象、教員や指導者から受けた指導) について関連性を検討した。

3) 分析方法

学年における得点の比較、他者との関わりおよび実習体験との関連、自尊感情・自己効力感との関連を分析するために、「卒業時修得コミュニケーションスキル尺度」の総得点、下位尺度得点を算出し下位尺度間の相関を確認

した。各尺度については、全体と各因子の Cronbach' s α 係数を算出し、信頼性および内的整合性を確認した。「卒業時修得コミュニケーションスキル尺度」の総得点および下位尺度の学年差について一元配置分散分析にて関連を検討した。

「他者との関わり」、「実習体験」について t 検定にて差の比較を行った。

各学年における下位尺度得点と「自尊感情尺度」、「自己効力感尺度」の関連について相関係数を求めた。研究 1 と研究 2 における「卒業時修得コミュニケーションスキル尺度」の得点について t 検定を行い、尺度の安定性を確認した。

3. 結果

分析の結果、下位尺度得点に有意差があったのは、第 5 因子「態勢を整えて会話を始めるスキル」の 1 年生と 4 年生であり、4 年生が有意に高かった ($p=.008$)。他者との関わりにおいて有意な差があったのは、第 2 因子「お互いの気持ちや考えを伝えあうスキル」の兄弟姉妹の有無で、兄弟姉妹がいない学生の方が有意に高かった ($t(223)=2.60, p=.01$)。自己効力感尺度、自尊感情尺度と卒業時修得コミュニケーションスキル尺度の総得点および下位尺度得点との相関において強い相関がみられたのは、1 年生と 2 年生の自己効力感と第 5 因子「態勢を整えて会話を始めるスキル」であった。卒業時修得コミュニケーションスキル尺度の安定性について、第 1 因子「相手の気持ちや考えを受け止めるスキル」において有意差 ($p=.03$) がみられ、その他の下位尺度得点では有意な差はみられなかった。

4. 考察

研究 1 では、「卒業時修得コミュニケーションスキル尺度」を開発し、その信頼性と妥当性を検証した。対象を患者に限定した項目は、「患者に偽りの希望をもたせるようなことを言わない」、「患者の表情や体調の変化の原因を考える」など 7 項目であり、その他の 41 項目に関してはグループメンバーや教員、臨床における専門職にも必要とされるスキルであるため、意見交換や報告などのコミュニケーションスキルも網羅できていると考える。

研究 2 では、コミュニケーションスキル修得に影響する要因について検討した。コミュニケーションスキル修得に影響を与える要因は、兄弟姉妹の有無と自己効力感であることが明確になった。兄弟姉妹がいない学生の方が下位尺度得点が高い理由として、兄弟姉妹がいない学生は父母や他者との会話が多いことが考えられた。

卒業時修得コミュニケーションスキル尺度の第 5 因子の 1 年生と 4 年生以外では、下位尺度合計点に学年差がみられなかったのは、学年が上がる

につれて看護学生に求められるコミュニケーションについて理解が深まり、自己のコミュニケーションスキルを評価する視点に差異が生じたため、学年が高くなるにつれ得点が高くなるとの予想と異なる結果となったと考える。

第 5 因子「態勢を整えて会話を始めるスキル」と自己効力感に相関があった理由として、第 5 因子に含まれる質問項目が「初めて話をする時は、自己紹介をして相手に自分を知ってもらおう」、「会話の始めに相手に目的を伝え、了解を得る」などの基本的なコミュニケーションスキルであり、自信をもって行える内容であるためと考える。

本尺度の安定性について、第 1 因子で有意な差がみられたのは、調査時期が異なり学生のレディネスの違いにより生じたと考える。

IV. 結論

本尺度は、看護学生が卒業時までには修得するコミュニケーションスキルの内容とレベルを示すことができたため、卒業時の目標が明確になった。また、本研究によって明らかとなった関連要因により、学生がコミュニケーションスキルの修得を支援するための示唆を得られたと考える

論文審査結果の要旨

【論文審査及び最終試験の経過】

令和 5 年 2 月 6 日（月）に第 1 回学位審査委員会を開催し、愛知県立大学看護学研究科学位審査規程第 13 条ならびに看護学研究科博士後期課程の学位に関する内規第 14 条及び第 16 条に基づき、学位審査委員 5 名で博士論文の審査を行った。

副論文として、「看護学士課程におけるコミュニケーション技術に関する研究（日本看護学教育学会誌, 22(2), 1-12, 2012）」「喘息学童の QualityofLife(QOL)評価について-対象属性での比較-（医学と生物学, 156 (4) 172-176, 2012) の 2 篇を確認した。本論文については、看護学生の卒業時修得を目指す他者とのコミュニケーションスキルの評価尺度開発を研究課題とし、その成果を含めて、独創性、新規性、発展性を有する研究であると評価した。また、研究目的に対する研究デザインとして、尺度開発と、コミュニケーションスキルに影響を与える要因に関する調査手順が適切であり、論旨が一貫していることが確認された。評価尺度開発における分析手順ならびに結果の示し方、論文中の図表の表記ならびに考察の一部について修正の指示があり、修正

を踏まえて最終論文で審査することとなった。

令和5年2月8日（水）に看護学研究科博士後期課程の学位に関する内規第17条に基づき50分間の公開最終試験を実施した。同日に第2回学位審査委員会を開催し、論文審査、最終試験の結果を踏まえ、学位審査委員全員の合意の上で、合格と判断した。

【論文審査及び最終試験の結果】

コミュニケーションスキルは、看護師にとって基本的技術であり、看護基礎教育で修得する必要がある。人間関係の希薄化や生活体験の不足を背景として、看護学生のコミュニケーション能力の向上には、看護基礎教育のより一層の強化を必要とする状況にある。看護学生は、患者のみにとどまらず、グループメンバー、教員、看護スタッフ等、様々な立場や年齢の人々とコミュニケーションをとることが求められる。これまでに開発された看護学生のコミュニケーションを測定する尺度は、コミュニケーションの対象を患者に限定している。そのため、コミュニケーションの対象を看護学生が大学生活で接する人々とし、卒業時に修得を目指すコミュニケーションスキルを評価するための信頼性・妥当性が確保された尺度の開発を目指す本研究課題は、独創性、有用性の高い課題と評価した。また、本研究課題では、コミュニケーションスキルに影響する要因を明らかにすることも目的としており、関連因子の探索により、教育的介入方法の示唆が得られることが期待された。

研究デザインは、研究1と研究2で構成された。研究1では、まず、評価尺度のアイテムプールの作成、臨床看護師ならびに看護教員を対象とした尺度項目の表面妥当性・内容妥当性に関する質問紙調査、看護教員による専門家会議における尺度の修正の順序が取られた。先行研究で開発されたコミュニケーション尺度やコミュニケーション項目の抽出を試みた研究の結果を検討し、56項目のアイテムプールを作成した。アイテムプールは、卒業時の到達することが期待されるレベルでの表記を念頭に置いて作成されており、学生のコミュニケーションスキルに関する深い洞察と丁寧な文献検討に基づいて尺度項目が作成されたと評価した。看護教員および臨床看護師101名による内容妥当性の評価では、尺度項目が必要とする評価が70%に満たなかったのは1項目であり、妥当な尺度項目が作成されていることが確認された。表面妥当性に関する記述意見をもとに専門家会議で修正を検討し、コミュニケーションスキルの原案を作成した。

次に、看護系大学に在籍する1～4年生8名による表面妥当性の質問紙調査に続き、看護系大学の学生293名を対象とした尺度開発のための本調査が実施された。項目分析、I-T相関分析、G-P分析による一貫性の確認、探索的因子分析による因子の抽出、内的整合性、ならびに「コミュニケーション・スキル尺度 ENDCORE s」「日本版 Rathus Assertiveness Schedule」を用いた基準関連妥当性の確認が行われた。その結果、「第1因子：相手の気持ちや考えを受け止めて会話するスキル」「第2因子：お互

いの気持ちや考えを伝えあうスキル」「第3因子：相手に関心を寄せて深く聴くスキル」「第4因子：自分の感情をコントロールして話しやすい状況を整えるスキル」「第5因子：態勢を整えて会話を始めるスキル」の5因子構造、48項目からなる評価尺度が開発された。評価尺度全体の信頼係数（クロンバック α ）は0.96であり、「卒業時修得を目指すコミュニケーションスキル評価尺度」と「コミュニケーション・スキル尺度 ENDCORE s」の合計得点の間に有意な高い相関（ $r=0.70$ ）が認められた。評価尺度開発の手順は、目的に照らして妥当なプロセスを経ており、かつデータが適切かつ論理的に分析されていると評価した。

研究2では、研究1で開発したコミュニケーションスキル評価尺度を用い、コミュニケーションスキルに影響する要因を明らかにすることを目的に看護系大学に在籍する235名の学生を対象とした質問紙調査を実施した。コミュニケーションスキルに影響を与える要因として、自尊感情、自己効力感、個人属性（性別、年齢、学年）、他者との関わり（家族構成、1日のインターネット閲覧時間等）、実習経験（ロールモデルの有無、コミュニケーションに関する指導の有無）を想定した。分析の結果、コミュニケーションスキルに影響する要因は、自尊感情、自己効力感、兄弟姉妹の有無であった。また、学年別では第5因子「態勢を整えて会話を始めるスキル」において1年生と比べ4年生が有意に高い得点であることが示された。コミュニケーションスキルと自己効力感には相関があることが示されたことから、臨地実習などにおいて、教員が、学生の優れたコミュニケーションに焦点をあてフィードバックすることで、スキル向上が期待できることが示唆された。審査委員会では、コミュニケーションスキルに影響を与える要因が、仮説と比して抽出されなかった理由や、結果に基づく看護教育への示唆について、より考察を深めることで、得られた成果の有用性が際立つことが指摘された。

本研究課題で作成されたコミュニケーションスキル評価尺度は、卒業時の到達度を目明確にしたことから、これまでの尺度とは異なるものであり、独創性、新規性を有する成果が得られたと評価した。

公開最終試験では、研究成果の概略を適切にプレゼンテーションできた。審査委員からは、本研究結果の独創性の観点から見たアイテムプール作成時において留意したこと、1年生から4年生の評価尺度の全体得点に有意な差がみられなかったことを踏まえて評価尺度を教育で活用する際の留意点など看護教育における評価尺度の活用方法、最終的な評価尺度の様式、研究2の評価尺度得点の基本統計量の解釈、コミュニケーションを患者に限定しない本評価尺度の名称の工夫について質問が出され、回答がなされた。博士後期課程の学習成果として、研究手法について、博士前期課程で学んだことが身につけられていなかったと実感し、博士後期課程で深く学ぶことができたこと、特に、統計手法については文献を紐解きながら取り組んだことで、身につけられたと語られた。今後は、大学院での学びを、教育者として学生指導に活

かしたいと展望が述べられた。

以上のことから、本学位審査委員会は、提出された本論文が、愛知県立大学大学院看護学研究科博士後期課程の学位に関する内規第 16 条の 2 項を満たしており、獨創性、新規性、発展性を有し、実証的かつ理論的に成果が導き出され学術上価値のある論文であると判断する。そして、申請者が看護専門領域における十分な学識と研究者としての能力を有するものであると確認したので、博士（看護学）の学位を授与するに値すると判断した。